

# 一味

いちみ

「お前たち、〇〇の一味だな」  
「一味唐辛子」



台詞よ、来なまてこと願う時  
外国で涙を流す人がいる  
老住手

一味の使い方はいくつもあるようですが、仏教では前者の使い方のほうが多いと思います。後者の一味唐辛子の「一味」は、混じりけの無い、純粹なという使い方ですが、依然興味深い話をラジオで聞きました。

“現代は、SNSなどで、世界中の人々とつながるようになった。しかし、視野が広がったのかと言えそうですが、反対に、自分の許容する範囲の人としかつながらないようになってきている。煩わしい現実の人間関係を避け、インターネットで安易につながることができると、それは、排他主義に発展しやすく、ブログ炎上などの一斉攻撃となる。つまり、他の価値観を認められなくなってきた。”

正信偈には、如衆水入海一味と、どんな川も海にたどり着けば、同じ塩味となるように、どのような人も、みな阿弥陀如来の本願の海に入り等しく救われる、とあります。



違いを認めあい、グローバル主義は排他主義を招く一因となりやすいことも忘れてはならないと思います。

# こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。



文字が読めない人を一文不知といいますが、浄土宗の法然聖人は、阿弥陀如来の光に照らされて、我が身の程を映し出されて、自らを一文不知の愚鈍の身であると言われました。本当の知識人はこのような方だろうと思います。

立川志の輔さんの初期の新作落語に「みどりの窓口」があります。舞台は東京駅のみどりの窓口。駅員さんがある日さんさんな目に合う。指定席がないと言うと国会議員の分があるだろうという客、大量の注文したものの大安かどうかわからないからと帰ってしまう老夫婦。次に来たのが江戸っ子の親父。業務が終わり、友人と居酒屋で愚痴を言うと、駅でお客さんにされたことと同じことを、いつのまにか居酒屋の店員にしていた・・・。

人のことはよく見えてもわが身のことはなかなか見ることができません。手を合わせることは、なかなか気づかないわが身を、仏さまに映し出させて頂くことでもあるのです。

# 一文不知

いちもんふち

